スポーツ活動が対人魅力に及ぼす影響

佐山　健太郎
（有馬淑子ゼミ）

人に好かれたいと思ったことはないだろうか。人に好かれるには、自分が魅力的であれば自然と周囲には人が集まるのだろう。しかし、その魅力とはなんなのであろうか。それは男女によって違うのであろうか。生まれ持った容姿以外の特性であれば、どういった要因に魅力を感じるのだろうか。

この研究は、私がスポーツを積極的に行っていることから、スポーツが対人魅力に及ぼす影響に興味を持ったことに始まる。スポーツをしている人は就職の面接などに際してもよい印象を持ってもらいやすいとされる。私の通っていた中学・高校では、男子はサッカーや野球をしている子の人気が高く、女子はテニスやバドミントンをしている子の人気が高かったイメージがある。米国のドラマなどを見ても、若者の人気者はフットボール選手とチアリーダーが定番である。しかし、それはどこまで本当なのか、はたしてスポーツは、異性の魅力に影響を及ぼしているのだろうか。そもそも、どのような異性を理想としているのかによって異なるだろうし、自分がスポーツをやっているかどうかでも異なるだろう。

このような関心から、本研究では、スポーツ活動の有無が性役割観や対人魅力に及ぼす影響を探索的に検討した。

対人魅力

対人魅力の研究分野においては、古くから、相補性仮説：「自分とは異なる特性を持つ他者を好きになりやすい (Winch,1955)」と、類似性仮説：「自分と似た特性を持つ他者を好きになりやすい (Byrne,1971)」が検討されてきた。Byrne(1971) は、態度測定尺度上に、自己と似た選択をしている他者と、異なる選択をしている他者を提示して、その他者に対する好意を測定する方法を確立した。この実験パラダイムによる多くの追試研究の結果、類似した態度をもつ他者に対するほど高い好意が示される結果が一貫して示されている。このように、自己に似た他者を好むか、あるいは自己とは異なる他者を好むか、という問題については、似た他者を好む、という一応の結論が得られていると言ってよい。しかし、自己評価が絡む要因、たとえば性格特性などを指標とした場合については、似た他者を好むかどうかの結果は一貫していない。結果が一貫しない理由として、藤島 (2005) は、社会的に望ましい特性であるかどうかが媒介要因として影響していることを指摘している。すなわち、自分にとって望ましくない特性であれば、似ていることが必ずしも好印象につながらないのである。

本研究であつかう性役割観についても、類似性仮説が当てはまらないことが予想される。たとえば、女性にとっては、女性役割の認知が必ずしも自己評価の高さとはつながらないことが知られている。通俗的なイメージとしても、男性的なヒーローは女性的なヒロインに好意をもち、女性的なヒロインは男性的なヒーローに好意を持つ。これは類似性仮説よりも相補性仮説を支持する関係といえるだろう。この関係性においては、スポーツをすることは、男性にとっては魅力を高めるが、女性にとっては魅力を低めることになるのかもしれない。

性役割観

性役割観とは、男性はかくあるべし、女性はかくあるべし、という信念である。時代や社会によって異なり、男性と女性にも信念の差がみられる。ベム (1974) はパーソナリティ特性測定尺度 BSRI を用いて、男性性尺度得点と女性性尺度得点の組合せによりアンドロジニー型 (男性性・女性性がともに高い男女)、セックスタイプ型 (男性性が高い男性・女性性が高い女性)、クロスセックスタイプ型 (女性性が高い男性･男性性が高い女性)、未分化型 (男性性・女性性がともに低い男女) の

4 種類に分類している。アンドロジニーは , さまざまな状況に合わせて、男性的にも女性的にもなりえるため、より適応的であると考えられている。すなわち、男性役割あるいは女性役割に自己を固定せず柔軟に変化しうるパーソナリティがもっとも望ましいとされる。

もっとも、アンドロジニアス（両性具有性）が適応的であるかどうかは、時代や社会、所属する集団状況によって異なる。現代においても、男性的な女性ヒロインは一般的に受け入れられやすいが、女性的な男性ヒーローは一般的でない。アンドロジニーの概念は女性性と男性性が等価であることが前提だが、男性性に対するポジティブな評価と、女性性に対するネガティブな評価という非対称性が、現代においても未だに残されている。たとえば、思春期の女性に特有な摂食障害などの不適応行動には、性役割観が絡むことが指摘されている。性役割観の受容には身体イメージが関連しており、女性らしい身体に満足している女性ほど女性役割を受容しやすいが、自己の身体イメージに満足できない女性は外見の改造を試みることになるのだろう。

性役割観とスポーツ

スポーツには力強いイメージがあり、男性的な活動としてとらえられやすい。よって異性に対する魅力としては、スポーツを行っていることは男性性としてはプラスであっても女性性にとっては、両価的な活動になる。スポーツは摂食障害とは異なり、健康的な身体を作る活動であるが、女性らしい女性というよりは、アンドロジニアスな魅力に近づく活動といえそうである。一方、男性の場合は、スポーツにより保守的な性役割観を持つようになるとの指摘（Houseworth ら、1989）がある。

萱村ら (2003) は、スポーツ実施群・一般群における性役割意識と身体満足度の関係検討している。その結果、一般群については、身体満足度の高い女子は男性に対して女性性を、女性に対して男性性を求めるのに対して、男子は、女性には女性性を、男性には男性性を求める結果が示されている。すなわち、女子はアンドロジニー型を理想とするのに対して、男性はセックスタイプ型を理想としている。しかし、この関係はスポーツ群にはみられず、スポーツをすることにより特に男性の保守性を強めるとする指摘はあたらないとしている。

佐藤ら (1999, 2004) は、やはり女性が両性具有性を求めるのに対して、男性の方が保守的であること、特にスポーツをあまりしていない男性の方が、女性に一般的な「女性らしさ」を強く求める傾向を報告している。

以上の研究を概観すると、女性が両性具有性を求めるのに対して、男性の方が男女の役割については保守的であることについては共通しているが、スポーツの影響については一貫していない。自己の身体満足度が媒介要因となっているところから、結果が一貫しない理由としては類似性研究結果に見られたように、自己概念が絡んでいることが予想される。また、先行研究においてスポーツ実施群には明確な結果が得られてこなかった理由として、スポーツに求める効用が人によって異なることが影響しているのかもしれない。たとえば、スポーツにより強くなることを求める人もいれば、やせて美しくなることを求める人もいるだろう。前者はスポーツに男性性を求めているが、後者はスポーツに女性性を求めていることになる。そこで、スポーツに強さを求めているかどうかによる影響も検討することとした。

仮説

本研究では、スポーツ実施群と非実施群を比較するにあたって、次の要因を調査することとした。まず、簡単な特性語を調査する項目の中にスポーツ活動を含めて、理想の異性のイメージを測定した。この項目の因子分析により、スポーツ活動が男性性の因子の中に含まれることを確認する。その上で、理想のイメージに男女差があるかどうか、スポーツ実施・非実施群に差があるかどうかを検討する。次に、BSRI の項目を用いて、自分自身の性役割と望ましい異性の性役割を同時に測定する。この項目により、自他に認知される性役割に類似性がみられるかどうか、その関係に性差とスポーツ実施による差があるかどうかを検討する。

過去の男尊女卑の時代を経て、現代では男女が対等であるという思想は広くいきわたり、女性は男性に対して対等な関係を求めている。一方、男

性にはまだ男性優位を理想とする考えが残っている。よって、対人魅力については、男性は女性に女性性をもとめる相補性仮説が成り立つが、女性は自己にも異性にも同じような魅力を求める類似性仮説が成り立つのではないかと予測する。しかし、スポーツ活動によって、これらの関係には変化があるだろう。これがどのように変化するのかについては、本研究では仮説を立てずに探索的に分析を行った。

仮説１　スポーツは男性的な活動とらえられているだろう。
仮説２　理想の異性イメージには、男女差があるだろう。
仮説３　理想の異性イメージには､スポーツ実施･非実施群に差があるだろう
仮説４　自他の性役割観には、男女差があるだろう。
仮説５　自他の性役割観には、スポーツ実施・非実施群に差があるだろう。
仮説６　男性の場合、自己の性役割と理想の異性の性役割の間にマイナスの相関関係が見られるが、女性の場合は、プラスの相関関係が見られるだろう。

方法

調査対象者

京都学園大学　大学生 117 名　（男性 63 名、女性 54 名　平均年齢 19.91 歳）

手続き

2012 年 10 月社会心理学・教育心理学の授業において、スポーツと異性の魅力、性役割パーソナリティについて調査することを目的とする質問紙を実施した。

質問項目

質問項目は、以下の順に配置された。

１）理想の異性イメージ（６項目）

この項目は、比較的自己評価の絡まない形で測定を行うために性役割観やスポーツ実施を問う項目の前に置かれた。理想の異性イメージとして、１．知的である　２．スポーツをしている　３．お金を持っている　４．力強い　５．優しさ　６．美しさの６項目それぞれについて、全くあてはまらないから、非常にあてはまる、の７段階で評定を求めた。各項目の得点を､｢知的｣評価点｢スポーツ」評価点「お金」評価点「力強さ」評価点「優しさ」評価点「美しさ」評価点と記述することにする。

２）スポーツ行動

スポーツを普段行っているか、どのような種類のスポーツであるか、そのスポーツに対するイメージの３項目について回答を求めた。スポーツを行っている群を実施群（48 名）行っていない群を非実施群（68 名）として、分析に用いた。スポーツ実施群のうち男性は３２名､女性１６名、スポーツ非実施群のうち、男性は３０名、女性は３８名であった。

３）性役割行動

本研究では BSRI 日本語版東 (1990；1991) を用いた。性役割パーソナリティ（Bem Sex Role Inventory　：BSRI (Bem,1974) のそれぞれの項目について、自分自身にあてはまるか、好きな異性にあてはまるか (30 項目 × 2 場面) を同じスケール上に異なる記号で記すように求めた。測定結果については、いわゆる４タイプには分類せず、尺度得点をそのまま分析に用いた。男性性因子に関わる得点を、男性役割得点、女性性因子に関わる得点を女性役割得点と記述する。

結果

１）理想の異性のイメージの因子分析結果

理想の異性イメージ６項目 (知的・スポーツ・お金・力強さ・優しさ・美しさ) に対して最尤法により因子抽出を行った結果、２因子が得られた。第１因子の寄与率は 36.2% 第２因子の寄与率は 22.77％である。クォーティマックス斜交回転を行ったところ、第１因子に高く負荷した項目は、「スポーツ」､「お金」､「力強さ」であり、男性性にかかわる因子と考えられた。第２因子に高く負荷した項目は、「優しさ」であり、女性性にかかわる因子と考えられた。全体として、「スポーツ」は男性性にかかわる因子内に含まれていた。この因子構造に男女に違いがあるかを調べた。男女別

に実施した因子分析結果を表１に示す。

表１　理想の異性イメージ因子分析

男性

	因子	
	1	2
Q1 知的	.309	.003
Q1 スポーツ	.286	.941
Q1 お金	.273	.431
Q1 力強さ	-.209	.425
Q1 優しさ	.714	.213
Q1 美しさ	.959	-.054

女性

	因子	
	1	2
Q1 知的	.089	.583
Q1 スポーツ	.503	.004
Q1 お金	.787	-.033
Q1 力強さ	.585	.044
Q1 優しさ	.555	.590
Q1 美しさ	-.069	.493

男性のみを対象として最尤法により因子抽出を行った結果、２因子が得られた。第１因子の寄与率は 37.83% 第２因子の寄与率は 24.61％である。クォーティマックス斜交回転を行ったところ、第１因子に高く負荷した項目は、「優しさ」と「美しさ」であり、女性性にかかわる因子と考えられた。第２因子に高く負荷した項目は、「スポーツ」と「お金」と「力強さ」であり、男性性にかかわる因子と考えられる。

同様に、女性のみを対象として因子分析結果を行ったところ、第１因子に高く負荷した項目は ,「スポーツ」、「お金」、「力強さ」であり、男性性にかかわる因子と考えられた。第２因子に高く負荷した項目は、「知的」、「優しさ」、「美しさ」であり、女性性にかかわる因子と考えられた。第１因子の寄与率は 37.02% 第２因子の寄与率は 23.2％である。

男性にとっては女性性が、女性にとっては男性性が第１因子として析出された。因子分析の結果を見ると、男性の方が保守的な男性性—女性性の認知構造を持つのに対して、女性の方は男女の差が曖昧な認知構造を持っている。男性にとって、理想の異性に求める男性性因子と女性性因子は、負荷する項目が明確に分かれるものであったが、女性にとっては、理想の男性に求める男性性因子と女性性因子は男性にとってさほど明確に分けられるものではなかった。男性にとって理想の女性に求める女性性因子は美しさと優しさのみであるのに対して、女性が理想の男性に求める男性性因子には「優しさ」が、女性性因子には「知的」が含まれていた。

スポーツの項目に関しては、男性においても女性においても、明確に男性性の因子に負荷していた。よって、スポーツ活動は男性性因子に含まれるとした仮説１は支持された。

次に、各項目に対する性差とスポーツ実施群と非実施群の差を検討する。

２）理想の異性イメージ単純集計結果

男女およびスポーツ実施群非実施群における平均点を表２・表３に示す。

表２　理想の異性イメージの男女差

性別		知的	スポーツ	お金	力強い	優しさ	美しさ
男性	平均値	4.77	4.00	3.52	3.21	5.81	5.02
	度　数	62	62	63	62	63	62
	標準偏差	1.360	1.669	1.605	1.590	1.318	1.584
女性	平均値	4.93	5.04	4.54	4.93	5.80	5.26
	度数	54	54	54	54	54	54
	標準偏差	1.130	1.517	1.424	1.330	1.265	5.997
合計	平均値	4.84	4.48	3.99	4.01	5.80	5.13
	度数	116	116	117	116	117	116
	標準偏差	1.255	1.676	1.600	1.702	1.288	4.233

表３　理想の異性イメージのスポーツ実施による差

スポーツ活動		知的	スポーツ	お金	力強い	優しさ	美しさ
なし	平均値	4.96	4.19	4.06	4.07	5.76	5.24
	度　数	67	67	68	67	68	67
	標準偏差	1.211	1.734	1.601	1.682	1.247	5.413
あり	平均値	4.71	4.88	3.92	3.88	5.83	5.00
	度　数	48	48	48	48	48	48
	標準偏差	1.320	1.539	1.622	1.734	1.358	1.624
合計	平均値	4.85	4.48	4.00	3.99	5.79	5.14
	度数	115	115	116	115	116	115
	標準偏差	1.258	1.682	1.604	1.699	1.289	4.251

平均の差の検定の結果、スポーツ（$t = -3.51$, $p<.01$）お金 ($t = -3.59$, $p<.01$) 力強い ($t = -6.25$, $p<.01$) の項目について、男女差が見られた。女性は、理想の異性に対して、これらの項目を男性よりも重視している。因子分析では男性の方が保守的な認知構

造を示していたが、単純集計の結果からみると、男性よりも女性のほうが保守的な性役割観を持っている。この点については、性役割尺度を用いて再度検討を行う。

スポーツ活動実施･非実施群の差として､スポーツの項目に差が見られた (t = - 2.18, p<.03)｡スポーツ実施群は非実施群よりもスポーツを実施する異性に魅力を感じている。この結果にさらに性差の影響があるかどうかを分析するために､「スポーツ」評価点に対して分散分析を行った。その結果、スポーツ有無の要因の主効果 (F(1,111)=9.06, p<.03) と、男女についても主効果 (F(1,111)=15.15, p<.01) が有意に認められた。グラフを Fig.1 に示す。

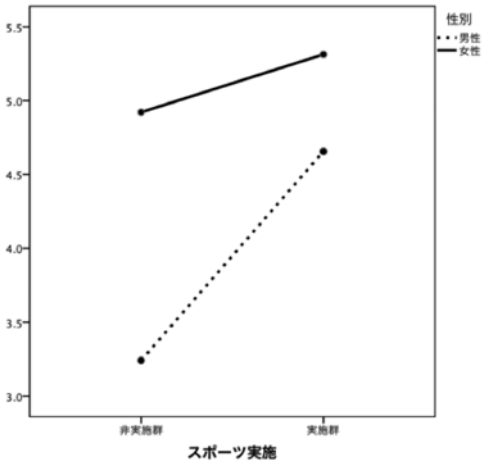

Fig.1 異性の魅力としてスポーツを重視する程度への性差・スポーツ実施効果

女性は男性よりもスポーツをしている異性に魅力を感じている。また、スポーツをしていない男女よりもスポーツをしている男女の方が、異性の魅力として、スポーツをしていることを重要視している。交互効果は認められなかった。

以上の結果より、女性は男性性と女性性を見分ける認知構造が曖昧ではあるものの、異性にスポーツや力強さを求めていた。よって理想の異性イメージに男女差があるとする仮説２は支持された。また、スポーツを実施している男女はしていない男女よりもスポーツをしている異性に魅力を感じていた。よってスポーツ実施により理想の異性イメージが異なるとする仮説３は支持された。

３）性役割得点

性役割尺度３０項目それぞれについて、自分にあてはまるかどうか（自己）と、理想の異性にあてはまるかどうか（異性）の評価を求めた。自己または異性を対象とした３０項目ごとに因子分析を行い、それぞれの因子構造の同じ因子内で、自己および異性に対して同じ項目に負荷したものを選択した。その結果、第１因子として、自分の能力を信じる、頼りになる、意思決定ができる、優しい、リーダー的、純真、人づきあいがうまい、の項目が残された。優しいが男性役割に含まれる点については、上述した理想の異性イメージ因子構造の女性による結果と一貫している。これらの項目を肯定的な男性性を表す項目として、男性役割得点と命名した。第２因子として、他者の表情に気をつける、表情の変化を見逃さない、人の考えを読みとる、人の言動に注意を払う、人の気分変化に注意を払う、人のことに思いをめぐらす、人のことが心に浮かぶ、人のことを考える、の項目が残された。これらの項目を女性的な感受性を表す項目として、この合計点を女性役割得点と命名した。それぞれの α 係数は、自己に関する男性役割については .83 、異性に関する男性役割については .81、自己に関する女性役割は .92、異性に関する女性役割は .89 であった。いずれについても , 十分な一貫性が得られており、合計得点として指標に用いることができる。

男女それぞれの性役割得点を Fig. 2 に示す。これらの傾向が有意であるかを、次の分散分析により検討する。

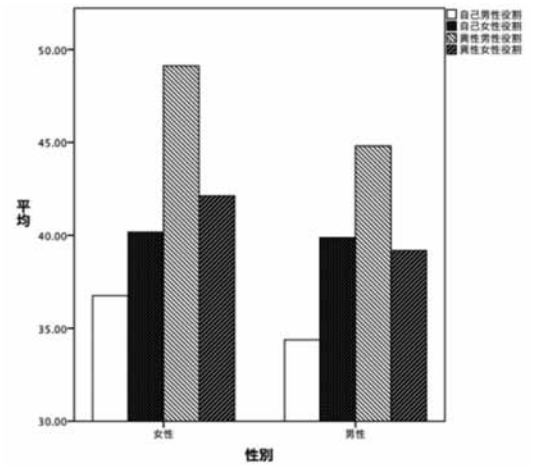

Fig. 2 性役割得点の男女差

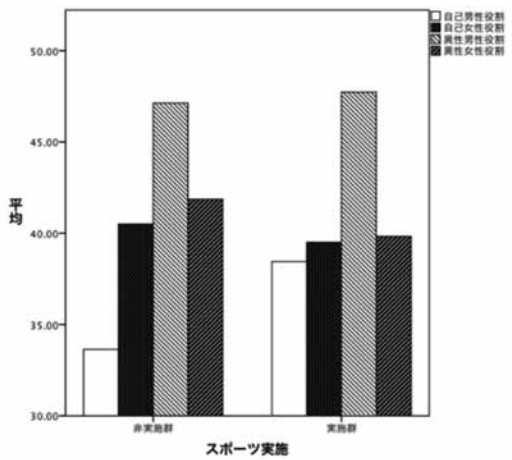

Fig. 3 性役割得点に対するスポーツ実施の効果

4）性役割得点へのスポーツ実施の影響

性別（男・女）、スポーツ（実施・非実施群）を被験者間要因、性役割（男性役割・女性役割）と性役割の評価対象（自己・異性）を被験者内要因として分散分析を行ったところ、評価対象の主効果 ($F(1,36)=8.9, p<.01$) 性役割と評価対象の交互効果 ($F(1,36)=16.92, p<.01$)、および、性役割とスポーツの交互効果（$F(1,36)=7.19, p<.03$）が見いだされた。性別の効果は主効果にも、交互効果としても見いだされなかった。よって、性役割観に男女差があるとした仮説４は支持されなかった。

性別の要因を除いたグラフを Fig. 3 に示す。男女とも、理想の異性に対する男性役割が高く求められる一方で、自己の男性役割に対する評価は男女とも低い。この関係が、性役割と評価対象の交互効果として示されている部分である。スポーツ実施群は、男女を問わず男性役割評価が高く、女性役割評価が低くなっている。スポーツ実施によって性役割観が異なるとした仮説５については、このように、性役割との交互効果の形で支持された。次に、類似性と相補性のどちらの仮説が支持されるのかについては、相関関係から検討する。

5）類似性仮説の検討

自己に対する男性役割得点、異性に対する男性役割得点、自己に対する女性役割得点、異性に対する女性役割得点の４つの指標間の相関関係から、対人魅力の相補性仮説が成り立つかどうかを検討した。全体としては、自己に対する男性役割と自己に対する女性役割の間に弱い相関が見られた。($r(113)=.327, p<.01$) が、それ以外には相関は見られなかった。女性役割と男性役割は基本的に相反するものではなく、どちらもポジティブな評価軸として認知されているようである。

性別およびスポーツ実施群別に４指標間の相関を分析した結果、見いだされた有意な相関関係は以下の通りである。

スポーツ非実施群の男性による自己の男性役割と異性の男性役割の間に、$r(6)= -.84$ ($p<.05$) の負の相関が認められた。スポーツを実施していない男性は自己の男性役割が高いほど異性の男性役割を低く求めている。一方、スポーツ非実施群の女性には、性役割観の間に有意な相関は見いだされなかった。

スポーツ実施群の男性には、自己の女性役割と異性の男性役割の間に $r(11)=.74$ ($p<.01$) の相関がみられた。さらに、スポーツ実施群の男性には自己の男性性と女性性にも高い相関 ($r(30)=.69, p<.01$) がみられている。男性の場合は、スポーツをすることによって、アンドロジニアスな性役割観が高くなっていると解釈できる。一方、スポー

ツをしている女性には、自身に対する男性性が高いほど理想の異性の男性性も高くなるという、類似性の関係が見られる。($r(8)=.76, p<.03$)

以上の結果からは、スポーツをしている女性は理想の異性に対して類似性を求め、スポーツをしていない男性は理想の異性に対して相補性を求めていることが推察される。ただし、異性に対する性役割観項目に欠損値が多かったため、相関を算出するデータ数としては少なく、明確な証拠ではない。比較的確かな結果といえるのは、スポーツをしている男性はスポーツをしていない男性よりも自己に対してアンドロジニアスな性役割観を持っているところである。

６）スポーツに対するイメージによる性役割観の違い

追加分析として、スポーツに対するイメージとして、力強さを挙げた３６名と、それ以外の健康や美しさなどを挙げた８１名による性役割間の差を検討した。女性で力強さを挙げた人数は１５名（女性の 27.8%）、男性のうち力強さをあげた人数は２１名（男性の 33.3%）であり、χ 二乗検定を行ったところ男女差に有意差は見られなかった。そこで、性別とスポーツイメージ要因による分散分析を行った。自他に対する性役割４指標に対して、分散分析を行ったところ、自己の男性役割得点に対して、性別とスポーツイメージによる交互効果が見出された（$F(1,109)=6.85, p<.01$）．そのほかの指標に対しては効果は見いだされなかった。結果を Fig. 4 に示す。

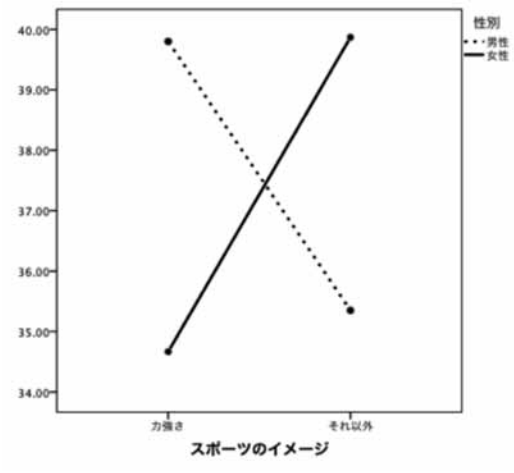

Fig.4 自己の男性役割得点に対する性別とスポーツイメージの影響

スポーツに対して力強いイメージを持っている男性は、その他のイメージを持つ男性に比べて、自己の男性役割得点が高い。一方、女性にはその逆の関係が認められ、スポーツを力強さに関連付ける女性は、自己の男性役割得点が低い。この関係においては、むしろ女性において対人魅力の相補性仮説が支持される。

考察

今回の調査により見いだされた結果をまとめる。まず、スポーツは男性性にからむ因子として認知されていた。理想のイメージには性差があり、女性は男性に力強さとスポーツを求めている。さらに、スポーツをしている人はやはりスポーツをしている異性を理想としている。

このように、理想の異性イメージを直接聞いた場合には、性差が認められたが、自己評価とともに異性の性役割を聞いた性役割観には、性差は見いだされなかった。スポーツをすることによる影響はあり、スポーツをしている人は、男性役割を高く、女性役割は低く評価する結果が見られた。性役割に絡む対人魅力は相補性か類似性か、という問題については、どちらも支持する結果が得られており、結論はつかない。

傾向としては、スポーツをしている男女には類似性仮説があてはまるといえそうである。たとえ

ば、スポーツをする女性は自己への男性役割認知が高く、理想の男性への男性役割も高く求める傾向にある。一方､スポーツをしていない男女には、相補性仮説があてはまりそうな結果が多い。たとえば、スポーツを実施していない男性は自己の男性役割が高いほど異性の男性役割を低く求める傾向が認められる。さらに、スポーツに対して力強いイメージを持っている女性は、その他のイメージを持つ女性に比べて、自己の男性役割得点が低い。

本研究の結果全体としては、次のように考察している。スポーツをしない男女は現代においても未だ保守的な部分があり、相手に対して自分にないものを求める傾向がある。しかしスポーツをすることで、男女ともアンドロジニー的観点を持つようになるといえるのではないだろうか。現代のスポーツでは、男性だけ・女性だけといったものが少なく、五輪など国際大会でも男子があれば女子もあり、それぞれの試合を見る機会もあることから、男女で差別されていない。また、女性だけど男性よりも強いと思われる選手が居るため、自分達は対等であるという認識が成り立ち、アンドロジニアス的な自己観、他者観を持つに至ったのではないかと推測する。一方、スポーツをしていない男女は対等ではあるが、自分に足りない部分を相手に対して求める相補性が成り立つのかもしれない。固定的観念にとらわれないのであれば、他者に相補性を求めることも、必ずしも悪いことではないだろう。今回のデータでは、明確な相補性が成り立つとは言えなかったが、データ数を増やせばそういった結果が得ることができると考えられる。相関関係についてはデータ数が少なかった為､明確とは言えなかったことが反省点であり、今回以上に調査対象者を増やし、欠損値の少ないデータを取ることが今後の課題である。

スポーツをすることによって、男性らしさや女性らしさといったことに囚われなくなればより良い社会が形成されるだろう。そして、互いに互いを補うことが当たり前のような時がくればよいと願う。

引用文献

萱村俊哉 , 駒井説夫 , 黛誠　2003　大学生における性役割意識と身体満足度 , 及びそれらの関連性についての検討　性差及びスポーツ経験の差に着目して　武庫川女子大学紀要 . 人文・社会科学編 51, 67-79

佐藤馨 , 守能信次　1999　男女の性役割観とスポーツ実施に関する研究－自己の性および異性に対する性役割観とスポーツ実施環境に着目して－　日本体育学会大会号 (50), 293

佐藤薫　2004 性役割に対する価値観がスポーツ実施に及ぼす影響についてー既婚女性の性役割観とスポーツ実施状況に着目して　びわこ成城スポーツ大学研究紀要　1, 105-115

藤島喜嗣　2005 異性の対人魅力に対する社会的望ましさと類似性の効果　学苑　772, 11-20.

堀洋道 , 山本眞理子　2001　心理測定尺度集Ⅰ　人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉P142

Byrne,D.　1971 The attraction paradigm. Academic Press.

Winch,R.F.　1955 The theory of complementary needs in mate selection. American Sociological Review, 20, 551-555.

Houseworth, S., Peplow, K, & Thire, J. 1989 Influence of sport participation upon sex role orientation of Caucasian males and their attitude toward women. Sex-Roles, 20, 317-325.